



毛筆使用の試験風景（昭和初年）

大東文化学院では、入学試験を受ける受験生に筆と墨を持参することを課していました。当時の「入学要覧」（入試要項）には、「受験時ノ心得」のうち、「試験用具」について次のように注意事項が記されています。「イ、用紙ハ総テ本院ヨリ交付ス。ロ、答案ハ毛筆ヲ用フベシ。ハ、筆墨類ハ各自携帯スベシ」。入学後も定期試験はすべて毛筆を使用して記入するのが慣例でした。漢文試験や論文執筆が主だった学校で、筆で解答のすべてを書くのは相当の集中力が必要であったと想像されますが、旧制期の学生たちは伝統として毛筆試験を誇りに思っていたようです。

Contents

- ❖百年史編纂事業の進捗状況について
- ❖前川三郎関係資料が移管されました
- ❖学校法人大東文化学園「久敬会」の歴史
- ❖2016年リオ五輪記念
「第31回オリンピック競技日本代表陸上競技選手団」
直筆サイン入り記念皿
- ❖百年史編纂の現場から
- ❖大東アーカイブス活動記録

Daito Archives
Newsletter

大東文化歴史資料館
ニュースレター
エクス・オリエンテ

Vol.

30

Ex Oriente

百年史編纂事業の進捗状況について

百年史編纂委員会委員長

経済学部社会経済学科教授

中村宗悦

2021（令和3）年度前期が終わろうとしている現在、いまだ新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の収束が見通せず、大学はもちろん世の中全体の諸活動に多くの制限がかかっている状況です。本年度は昨年度とは異なり、4月当初より7割以上のクラスで対面方式授業がおこなわれ、キャンパスに学生も戻ってきていましたが、緊急事態宣言発令中は対面方式授業の一部が、一時的にオンライン授業に転換を余儀なくされてしまいました。

しかし、2023（令和5）年に創立100周年を迎える本学の記念事業の一環として位置付けられている百年史編纂事業に関しましては、徐々にではありますが着実に進展をみせています。前号でお知らせした通り、昨年秋には百年史の構成に関する大枠が固まり、現在、月1回程度開催しているワーキング・グループでの討議を経つつ、具体的な執筆を進めているところです。資料収集・整理は一応一段落していますが、引き続き新資料の発掘にもつとめながらの執筆作業となりますので、資料情報もお寄せくだされば幸いです。

さて、すでにお気づきの通り、『大東文化歴史資料館だより』はこの第30号からデザインを刷新し、ページも倍増いたしました。またEx Orienteという伝統ある名称を使用させていただいております。Ex Orienteとはかつて本学が大東文化学院時代に発行していた英文学術雑誌の名称です。近年、この雑誌を復活させようという試みはありましたが、今のところ頓挫している状況でもあり、このニューズレターに引き

継がせていただくことにいたしました。気持ちの上でこの名前に負けないようにこれまで以上に大学史に関するさまざまな情報をお届けして参りたいと存じます。

紙媒体での情報発信に負けず劣らず重要なものが、Webサイトを通じての情報発信となることは言うまでもありません。百年史編纂委員会では引き続き百年史特設サイト（「継往開来」<http://www.daito.ac.jp/100th/>）の内容充実をはかり情報発信を進めて参りますが、百年史編纂委員会の上位機関である大東文化歴史資料館のページ（<https://www.daito.ac.jp/100th/archives/>）も先日デザインを一新して公開しました。ご覧いただき、ご感想などをお寄せいただければ幸いです。

最後に、2020年度末に無事、『大東文化大学史研究紀要』第5号を発行できましたことをご報告申し上げます。引き続き、第6号発行に向けて準備をおこなってまいります。研究会については、次回いつ、どのような形でおこなうか、目途が立っていない状況です。研究会の開催が、どのような形になるのであれば、『紀要』は、年1回の発行を予定しておりますので、大学史に関するご研究の発表などございましたら是非奮ってご投稿をいただきますよう、お願い申し上げます。

なお、本年4月より大東文化歴史資料館の業務を新設の100周年記念事業推進室で兼ねておこなっていくことになりましたので、ご投稿に関するご質問や資料情報のご提供などに関しましては、下記の100周年記念事業推進室内の大東文化歴史資料館事務担当までお知らせくだされば幸いです。

大東文化歴史資料館事務室

（100周年記念事業推進室内）

電話 / 03-5399-7403 FAX / 03-5399-7391

archives@ic.daito.ac.jp

前川三郎関係資料が移管されました



2021年1月より、板橋図書館貴重図書として長く保管されていた「前川三郎関係資料」を大東アーカイブスへ移管する作業を順次進めています。

大東文化学院時代に教授をつとめた前川三郎は、1880（明治13）年11月に三重県に生まれた、支那詩学を専門とした漢学者で、研堂と号しました。1902（明治35）年より、国語漢文科中等教員及び漢文科高等教員試験に合格し三重県立二中、浜松中学、川越中学、東京府立一中などで教壇に立った後、1923（大正12）年より1944（昭和19）年まで慶應義塾専門部教員（後に慶應義塾高等部教授、慶應義塾名誉教授）を長くつとめました。1926（大正15）年度より大東文化学院教授となりましたが、在職期間はわずかに2年ほどでした。そのほか、聖心女子学院高等専門学校（現在の聖心女子大学）や智山専門学校（後に大正大学と合併）などの高等教育機関でも教鞭をとりました。

さて、前川三郎の大東文化学院在職はごく短期間ではありましたが、前川が所蔵し残した資料のなかには、これまでに未確認であった最初期の学院手帳や大正期の教授会資料のほか、大東文化学院の給与支払記録までが含まれていることが確認されました。本学としては“歴史的な大発見”と言えるほどの資料群で、百年史編纂の直前に入手できたことはまさに天恵でした。残された資料を精査していくと、前川がいかに几帳面かつ“捨てない”性格であったかが窺われます。前川宛書簡には、山本悌次郎や諸橋徹次といった大東文化学院関係者以外に、幣原喜重郎、佐佐木信綱、与謝野鉄幹・晶子夫妻、宇野哲人、長沢規矩也等といった、多方面にわたる当時の知識人たちからの貴重なものが多く含まれていましたが、そのほかにも、前川は自身がつとめた学校関係から送られた封書中の紙片や葉書もおそらくすべて残していたと思われ、保険会社や出版社から送られてきた使用済みの書留封筒までが大量に箱に詰められていました。また、前述の教授会資料のほか、大東文化学院の授業で使用したと思われるテキストやノート等も確認できました。

さらに前川は、日々のことはすべて日記や手帳にこと細かに

記録していました。大東在任中のものだけでも、入試採点のこと、卒業式後の謝恩会への参加、学校行事の引率を頼まれたことなどのほか、学会関係者との研究会や会合があればその参加者名も一覧にしてすべて日記に書き残していました。一方、家族の健康状態や家財道具の購入記録なども詳細に記しており、日記には公私にわたる内容が分け隔てなく書かれています。

前川が残したこれら膨大な資料は、前川家から大東文化大学へ、2度にわたって寄贈されたものでした。

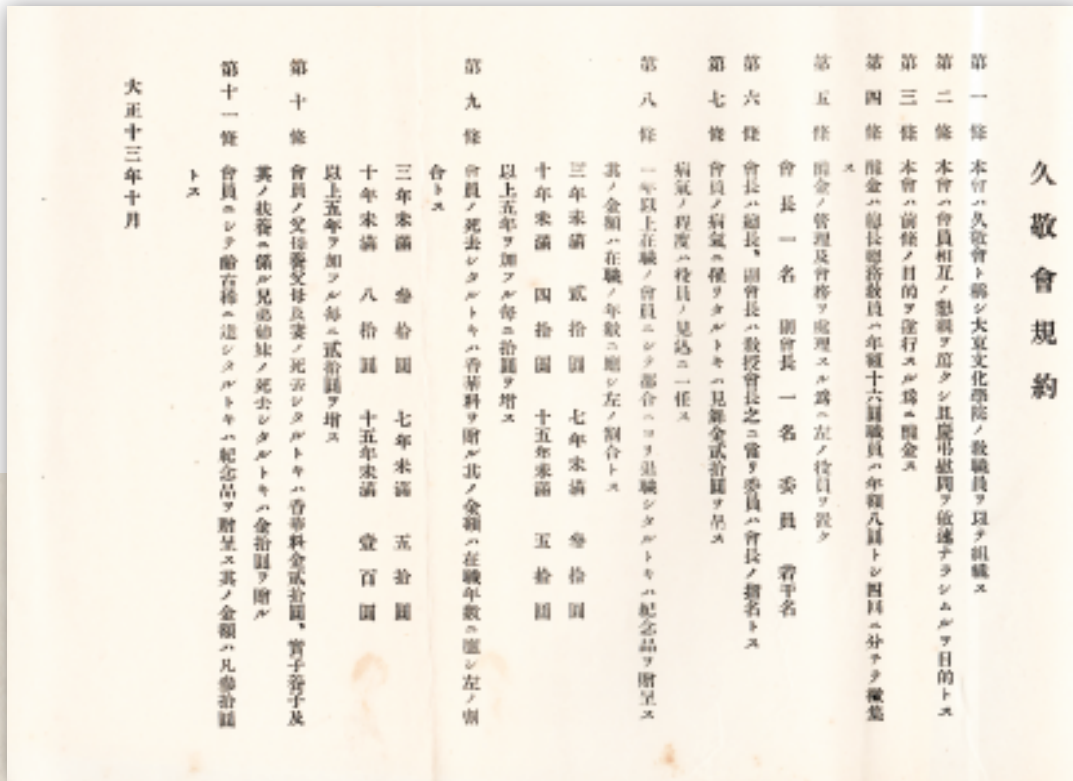
1度目は前川三郎の長男である前川文夫氏（当時東京大学教授、植物学者）からで、1963年のことでした。2度目の寄贈の申し込みは2010年のこと、文夫氏の長男、三郎の孫にあたる前川忠之氏からでした。このとき、前川文夫の研究に関する書籍や資料の一部は東京大学へ寄贈したと記録されていますが、それでも今回の移管作業のなかで確認したところ、文夫宛ての書簡類なども本学へ寄贈された資料のなかに多く含まれていました。

1963年の受領資料は、書籍類を中心とした約1万点でした。2010年の受領資料は、段ボール16箱に入れられた書簡や文書などで、前川三郎が在職した複数の学校関係資料を中心しつつ、三郎の日記および手帳類もかなりの分量を占めており、大東文化学院に関する貴重な記録も改めて多く含まれていることが判明しました。受け入れ時において、当時の図書館員である山本氏がファイルに入れるなどの仕分けをし、ある程度の分類や整理を進めてくれていました。そのため、今回の移管時においても資料の確認を比較的円滑に行うことができ、重要資料の確定が短時間で可能となりました。

これまで大東文化大学板橋図書館の地下にある貴重書庫で長く保管されていた前川三郎関係資料ですが、そのおかげで一つとして散逸破損することなく当時のまま置かれていました。状態も非常に良好で、現在では貴重な情報を伝えてくれる歴史資料となりました。百周年を機として、今後は大東アーカイブスにおいて有効に活用していくこととなります。

（歴史資料館運営委員 浅沼薫奈）

学校法人大東文化学園「久敬会」の歴史



学校法人大東文化学園には「久敬会」という組織があります。学園に携わり勤務する教職員すべての人が会員資格を持つものです。

「学校法人大東文化学園久敬会規約」によれば、第一条に「本会は、学校法人大東文化学園久敬会と称し学校法人大東文化学園（以下「学園」という。）並びに学園が設置する学校に勤務する教職員をもつて組織し、その事務所を東京都板橋区高島平1丁目9番1号に置く。」、第二条に「本会は、会員の慶弔見舞および懇親を目的とする。」と定められています。会員の様々なイベントに寄り添いつつ、学園関係者の親睦を深める役割を果たしているのが「久敬会」なのです。ちなみに、会長は学園理事長、副会長は大学学長がつとめるとされ、そのほか幹事として本学が運営する各設置校から1名ずつが選出されて就任し、実務は人事課が取り仕切っています。年に一度総会とともに開催される久敬会主催の懇親会を楽しみにしている会員も多いと思われますが、残念ながら昨年度から新型コロナウイルス感染症の影響で、2年連続で懇親会は中止となりました。

さて、この久敬会活動について定められた規約を見ると、制定日は「昭和39年12月1日」と記されています。そのため、久敬会は大東文化大学が板橋校舎へ移転してきてから（昭和36年8月に移転）発足したものと、ほとんどの会員が思うことでしょう。しかし、実は「久敬会」は本学草創期からまったく同じ名前と目的で存在しており、同様の活動を行っていました。

大東文化協会が大東文化学院を創設したのは、1923（大正

12）年9月20日のことですが、関東大震災によって校舎が焼失していたため、実際に開校したのは翌年1月でした。開校した1924（大正13）年の10月、大東文化学院は「久敬会」を設立します。

このときに制定された「久敬会規約」の第一条には、「本会ハ久敬会ト稱シ大東文化学院ノ教職員ヲ以テ組織ス」とあり、第二条には「本会ハ会員相互ノ懇親ヲ篤クシ且慶弔慰問ヲ敏速ナラシムルヲ目的トス」と、その目的が記されています。つまり、現在とほぼ同じ目的で活動が行われていたのです。しかも、会長、副会長、幹事（委員）の選出と役員構成もほぼ同じでした。第六条に「会長ハ総長、副会長は教授会長之二当り委員ハ総長ノ指名トス」と記されていることから、このことがわかります。

旧制期を通じて活動が維持された「久敬会」ですが、敗戦後の新制大学発足後にどのような経緯があったのか、板橋校舎移転後の発足までの経緯も現在のところ不詳となっており、その究明は今後の課題として残されます。

「久しくして之を敬す」という『論語』公冶長篇の一節からとられた「久敬」という名称は、つまるところ“親しき仲にも礼儀あり”という意味になるのでしょうか。付き合いの長い相手にも敬意を持ち続けること、先輩後輩、上司や同僚、様々な立場の人と親しく交わりながらも、常に相手へ尊敬の気持ちを持って接することの大切さを今に伝える言葉なのです。

（歴史資料館運営委員 浅沼薫奈）

2016年リオ五輪記念 「第31回オリンピック競技 日本代表陸上競技選手団」 直筆サイン入り記念皿



オリンピック開催と出場を記念して、“陸上競技”“水泳競技”などと競技ごとに選手たちの直筆サインを入れたお皿が作製されるようになったのは、いつ頃からの慣習でしょうか。

写真のものは2016年に開催されたリオ五輪に出場した陸上選手たちのサインが入った有田焼の記念皿（直径30cm）で、昨年大東アーカイブスへ資料移管されました。ブラジル、リオデジャネイロで開催されたリオ五輪には、大東文化大学の卒業生である佐々木悟選手（2008年卒）が男子マラソン競技に出場しており、その名前も記念皿に確認できます。

大東文化大学では、1972年の札幌冬季オリンピックを皮切りに、同年夏に行われたミュンヘンオリンピックへも在学を送り出しています。当初は冬季スキー競技やレスリング競技での出場が目立ちましたが、陸上競技部の強化に伴って、男子長距離競技における五輪出場も見られるようになりました。近年は改めて女子選手の活躍が目されるようになり、2012年ロンドンオリンピックにおける女子テコンドー競技での現役生の出場も見られました。テコンドー部は以降もオリンピック出場内定選手を輩出するなど、快進撃が続いています。男女ともに大東文化大学関係者たちの今後のスポーツ界での活躍がますます期待されます。

（歴史資料館運営委員 浅沼薫奈）

五輪代表選手（本学出身）

【陸上競技】

- 米重修一（1984卒）、ソウル五輪（1988）男子5000m／10000m代表
- 実井謙二郎（1991卒）、アトランタ五輪（1996）男子マラソン代表
- 土井杏南（2018卒）、ロンドン五輪（2012）女子4×100mリレー代表
- 佐々木悟（2008卒）、リオ五輪（2016）男子マラソン代表
- 鶴田玲美（2020卒）、東京五輪（2021）女子4×100mリレー（内定）

【レスリング】

- 佐藤貞雄（1976卒）、ミュンヘン五輪（1972）レスリング男子グレコローマン82kg級代表、モントリオール五輪（1976）レスリング男子グレコローマン90kg級代表
- 清水一夫（1977卒）、モントリオール五輪（1976）レスリング男子フリー100kg級6位
- 鈴木賢一（1992卒）バルセロナ五輪（1992）レスリング男子グレコローマン130kg級代表、アトランタ五輪（1996）レスリング男子グレコローマン130kg級8位
- 加藤賢三（2002卒）、北京五輪（2008）レスリング男子グレコローマン96kg級代表

【テコンドー】

- 笠原江梨香（2013卒）、ロンドン五輪（2012）テコンドー女子49kg級7位
- 鈴木セルヒオ（2017卒）、東京五輪（2021）テコンドー男子58kg級（内定）
- 鈴木リカルド（国際文化3年）、東京五輪（2021）テコンドー男子68kg級（内定）
- 山田美諭（2016卒）、東京五輪（2021）テコンドー女子49kg級（内定）

【冬季競技】

- 沖津はる江（1972卒）、札幌冬季五輪（1972）アルペン女子回転16位・滑降40位・大回転22位・複合12位
- 高橋弘子（1971卒）、札幌冬季五輪（1972）クロスカントリー女子5km34位・女子10km25位

【パラリンピック競技大会水泳競技】

- 小池さくら（スポーツ科2年）、東京パラリンピック（2021）競泳女子400m自由形S7（内定）

【パラリンピック競技大会ボート競技】

- 八尾陽夏（2020卒）、東京パラリンピック（2021）混合PR3舵手つきフォア（内定）

【冬季パラリンピック競技大会】

- 阿部友里香（2018卒）、ソチパラリンピック（2014）クロスカントリースキークラシカル、平昌パラリンピック（2018）ノルディックスキー

資料寄贈ご協力をお願い

大東アーカイブスでは、引き続き本学関係資料のご寄贈をお願いしております。学園沿革史に関わる資料がございましたら大東文化歴史資料館事務室（100周年記念事業推進室内）までご連絡いただきますよう、よろしく願い申し上げます。

News

百年史編纂の現場から

大東文化大学百年史編纂委員会副委員長

谷本 宗生

資料館だよりの前号、第29号（2021年2月）にて、100周年へ向けて刊行を予定している『大東文化大学百年史』の全体構成案については、中村宗悦百年史編纂委員会委員長が現時点の進捗状況として、皆さんに率直にお示ししているとおりです。中村委員長が示されましたその全体構成案にもとづきながら、百年史の各章ごとに設ける関係資料の検討や概説原稿の執筆などの作業に、私も編纂委員はもっか精力的に従事しています。

そこで、百年史編纂の現場から、私自身がどのように実際の作業に取り組んでいるのかなどを、具体的な内容にそって皆さんにお伝えしようと思います。たとえば、私は現在百年史の構成で第7章に取り組んでいます。本学の歴史でいえば、ちょうどキャンパス再開発と創立六十周年という節目にあたります。1970年代後半（昭和50年代）以降、18歳人口の大学収容がほぼ安定した状況を迎え、国の高等教育政策も量的な拡充から、地域的に均衡のとれた質・量の充実、私学の教育研究水準の向上及び特色ある発展などを重点化の目標として打ち出していた時期です。

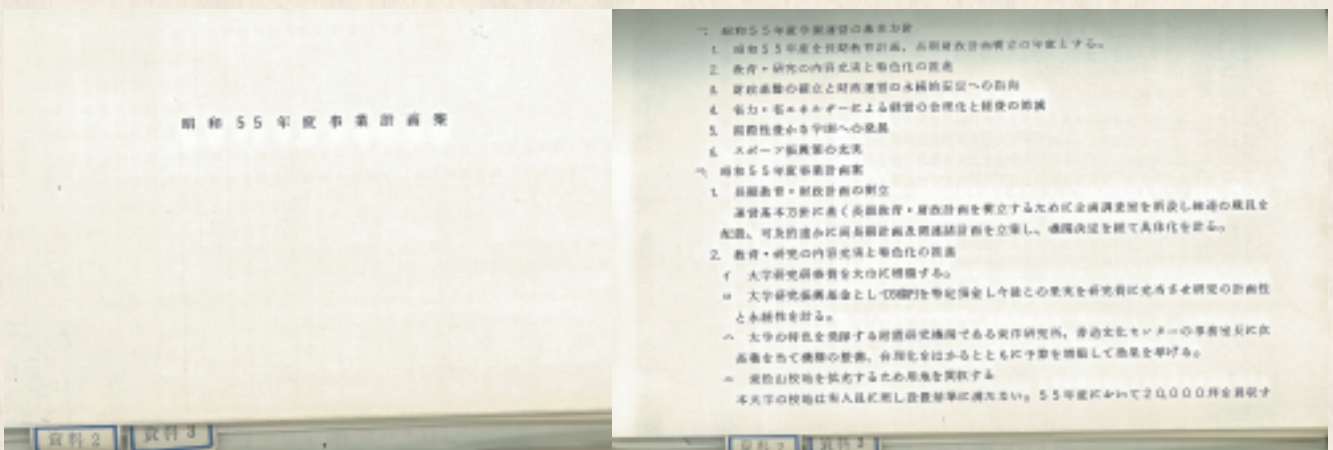
1979年12月の国の大学設置審議会大学設置計画分科会が公表した「高等教育の計画的整備について」の考え方にもとづいて、本学としても十分この線にそいながら主体的に特色ある計画運営がなされなければならないとし、1980年度を学園の長期計画・財政計画樹立の年度として定めるなど、以下のとおり、同年度における学園運営の基本方針を明らかにしています。

- (1) 80年度を長期計画、長期財政計画樹立の年度とする。
- (2) 教育・研究の内容充実と特色化の推進。
- (3) 財政基盤の確立と財政運営の永続的安定への指向。
- (4) 省力・省エネルギーによる経営の合理化と経費の節減。
- (5) 国際性豊かな学園への発展。
- (6) スポーツ振興策の充実。同上の基本方針にしたがって、事業計画も次のとおり定められました。①企画調査室

を新設して、将来に向けての長期計画・財政計画を企画立案する。②大学研究振興基金として8億円を充当し、研究の計画化及び永続化をはかる。③東松山校舎を拡充させるため、用地買収予算を6億円（2万坪）計上する。④体育振興基金として3億円を充当し、スポーツ振興の計画化及び安定化をはかる。⑤大型コンピューターを学園事務に導入し、81年度から全学の機械化をはかる。⑥国際交流や海外研修を促進するために、学務局に国際部を設けて関係予算の増額をはかるとする（「昭和55年度事業計画案」『理事会議事録』1979年）。

同章第1節の東松山校舎の再開発事業については、80年12月の本学理事会で長期事業計画概要（案）を了承し、東松山キャンパス開発計画基本構想書が策定され、翌81年8月に、東松山キャンパス拡張用地の開発行為許認可手続きにつき、東松山市長並びに埼玉県知事宛てに事前伺いがなされます。この間に、本学園の振興発展と管理運営組織の改善を目的とした全学組織のプロジェクトが編成され、学園振興発展計画特別委員会の長期事業計画小委員会に検討が付託され、同年12月に答申が出されました。それらの学園長期事業計画の内容を比較検討して、『学校法人大東文化学園長期事業計画』（昭和56～65年度）を策定したのでした。この『学園長期事業計画』では、国の高等教育施策が大都市集中の抑制と地域配置の適正化を促進する方向であり、本学としても「首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律」との関連において、新学部の増設も含めた教育環境の整備拡張は、東松山キャンパスを中心に想定せざるをえないと判断されたのでした。

東松山校舎の再開発事業は、82（昭和57）年11月より県道北側の隣接地7万7751㎡の土地を取得し、翌83年7月に開発拡張を進めて造成工事に着手します。84年11月には、東松山校舎建設の起工式が行われました。東松山校舎の建設工事は、

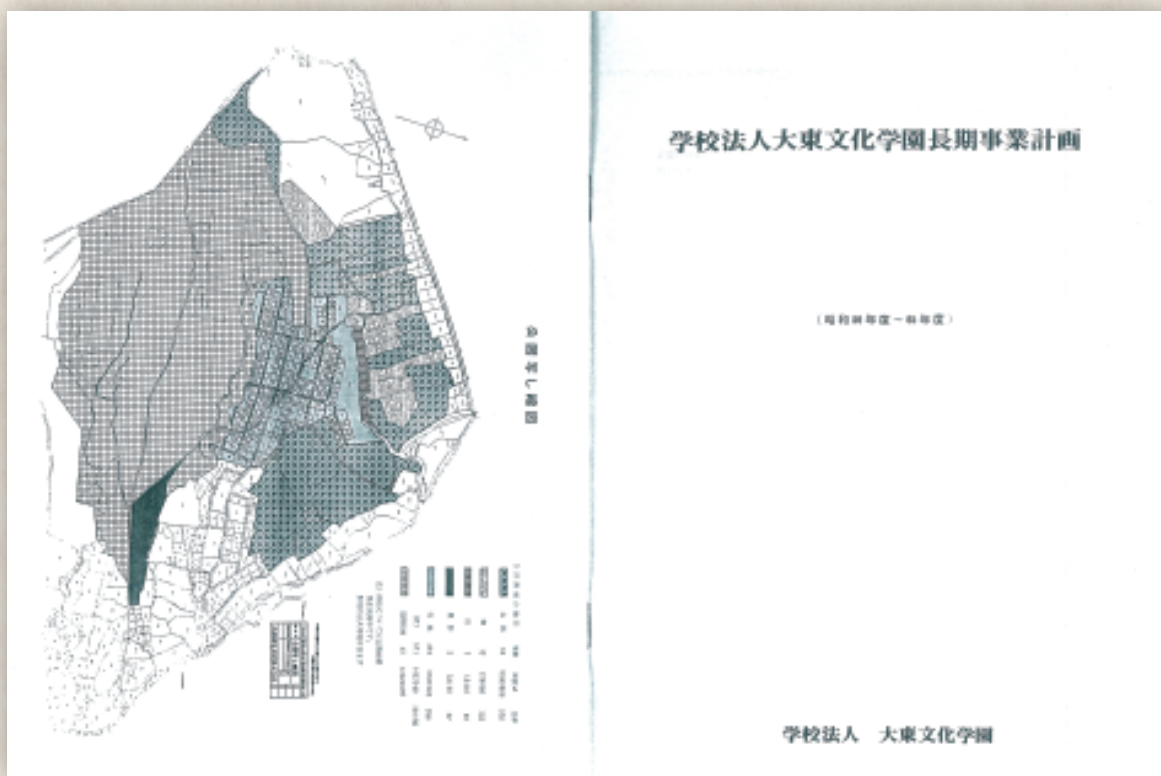


開発造成工事の85%にあたる第1期分として、校舎2棟、研究棟、図書館、講堂、エネルギー棟、守衛棟、オーバブリッジ（県道横断歩道橋）、体育館が86年2月に竣工されます。開発造成工事の15%にあたる第2期造成工事は、85年7月から着手され、既存の厚生センター、武道館、シャワー棟を解体し、第2期建設工事の準備を進め、室内プール棟、管理棟、食堂、学生ホール等が88年3月に竣工されました。東松山キャンパス開発事業の主要部分が完了し、82年の着工開始以来、足かけ6年の歳月を費やしたといえるでしょう。

同章第2節の新学部（国際関係学部）の設立については、『学校法人大東文化学園長期事業計画』によれば、東松山キャンパスの開発計画とともに、当初は本学創立六十周年を迎える83年度に申請手続きを行うと企図された本学第5番目の新学部で、旧東亜政治経済科の伝統を受け継ぐ国際政治経済学部（国際政治学科・国際経済学科）として構想されたのです。本学理事会の承認を得てこの新学部構想は進められましたが、83年7月の段階で国際政治経済学部の設置申請を取り止めてのち、文部省側の意向を十分に参考として、アジア圏（東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア）を対象とする国際関係学部（国際関係学科・国際文化学科）として、翌84年7月にあらためて申請されました。

国際関係学部（国際関係学科・国際文化学科）は、86年4月、在学生の全学年を東松山キャンパスに設置されます。同学部の教育・研究の特色としては、国際関係論と地域研究を中心に据え、その対象地域をアジア、とくに東アジア・東南アジア・南アジア・西アジアの4地域に限定します。発展途上国を含めたアジア各地域におけるスペシャリストの養成と国際化に対する社会的要請に対応すべく設置されました。国際関係学科（入学定員100名）では、国際関係についての基礎的理解を有しつつ、アジア各地域の政治・経済・社会事情に精通し、かつそれぞれの地域言語を駆使できる人材養成を目的とし、国際文化学科（入学定員100名）では、世界の文化について多面的視野を有しつつ、アジア各地域の文化・歴史・芸術に精通し、かつ地域言語を駆使できる人材の養成を目的とします。在籍学生に対しては、基本的な学問的訓練のほかに、アジア地域の諸言語の学習を義務付け、3週間を目安とした現地研修を課すことになりました。

同章ではこの他に、第3節の学生定員の増加と臨時定員増の受け入れ、第4節の教育課程と大学院・研究所、国際交流、第5節の創立六十周年記念事業、なども挙げられます。それらの内容につきましても、理事会や合同教授会の議事録などの基本資料をもとに鋭意編纂作業を進めていく所存です。



大東アーカイブス活動記録

2020年10月～2021年3月

10.1	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会オンライン参加
10.2	令和2年度第2回運営委員会（メール会議）
10.16	WG会議 令和2年度第2回百年史編纂委員会
10.22	令和2年度第3回運営委員会（メール会議） 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会オンライン参加
11.2	総務課より資料移管 徳丸研究棟3階「百年史編纂室」開室準備開始
12.2	WG会議
12.10	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会オンライン参加
12.11	WG会議
12.16	大東文化大学史紀要編集委員会会議
12.21	100周年記念事業推進委員会資料見学対応
1.8	WG会議
1.12	紀要編集打ち合わせ
1.13	板橋図書館貴重図書移管打ち合わせ
1.14	橋本吉右氏より資料受領
1.21	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（於：神奈川大学） オンライン参加
1.22	大橋二郎氏（元スポーツ科学科教授）より資料受領
1.26	資料館見学案内対応
2.1	百年史編纂室、徳丸研究棟3階に開室
2.3	WG会議
2.28	ニューズレター「大東文化歴史資料館だより」vol.29発行
3.8	板橋図書館貴重図書移管作業
3.9	WG会議
3.10	令和2年度第3回百年史編纂委員会 令和2年度第4回運営委員会
3.11	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（於：印刷博物館） オンライン参加
3.31	『大東文化大学史研究紀要』第5号発行

お知らせ

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大対策として、板橋校舎2号館の展示室は当面のあいだ閉室といたします。再開日時が決定しましたら、ホームページなどでご案内する予定です。そのほかの活動については通常通りです。ご質問などございましたら、大東文化歴史資料館までお問い合わせください。

Ex Oriente | Daito Archives Newsletter Vol.30

発行：2021年7月31日

編集発行：大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10 大東文化大学徳丸研究棟3階

TEL 03(5399)7646 FAX 03(5399)7647

E-mail : archives@ic.daito.ac.jp

URL : <https://www.daito.ac.jp/100th/archives/>

『大東文化大学史研究紀要』 第6号 原稿募集

第6号紀要（令和3年度発行）の投稿締切りは令和3年12月中旬を予定しております。投稿を希望される方は、氏名・ご所属のほか、原稿（論文その他）種別、予定されるタイトル及び文字数を令和3年10月末日までにこちらのメールアドレスへお知らせください。ご質問等も随時受け付けております。

エントリー（投稿）・そのほかに関する問い合わせ先：

archives@ic.daito.ac.jp

「投稿規程」詳細については、百年史編纂サイト「継往開来」（<https://www.daito.ac.jp/100th/bulletin/>）

でも公開しておりますので、必要に応じてご確認くださいませようお願い申し上げます。積極的なご投稿をお待ちしております。

Ex Oriente

『Ex Oriente』（エクス・オリエンテ）は、かつて大東文化協会比較研究部が機関誌として1925（大正14）年4月に創刊した雑誌名でした。英仏独の3ヶ国語のうち、いずれかで執筆された論文のみを掲載し、西欧諸国へ向けて、東洋文化に関する最先端の研究結果を知らせたいとの目的で発行された同誌は、当時わずか3号のみの発行（1988～93年に東洋研究所が続号として4～6号を発刊）となりました。以降、幻となっていた雑誌名を大東アーカイブスで受け継ぐことといたしました。